208
5
715

高尾舩字文

後編 上

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

曲亭馬琴翁編

歌川國貞画圖

高尾船字文

小傳馬町
鶴屋重三郎
芳町河岸通り左衛門町
栄屋文七
合板

高尾船字文第三冊

○岩手山よ谷蔵狼と
附り 夫ハ武州の景陽岡
是ハ奥州南部越
其勇力ハ山鳥驚

○花街乃放生會よ
附り 夫ハ淀中山金沙灘
是ハ陸奥満又川
其快船ハ御迚進

○荒獅子洋よ大擾を按く
附り 夫ハ魯連が五基山
是ハ荘若乃進も将
其忠臣ハ黒龍神

中性文庫
48.9.3

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

荒獅子男之助重宗

却テ喜ン驗ー人稱ノ第一ト至レ今テ

喚ー做ス百花王ト

獅子ノ

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

高尾船字文 巻二

岩魚山よさぬ川狼どうし

曲亭馬琴著

二

綺川谷義介おのれも馬方山人が弥人なり。信濃一宮戸川のまもる
なりけるが。狩猟に出て。やゝ程の方へ行しが。日暮れ。
雪は追々の人ねもちくて。進むことかなわざれば。こゝに
宿かりよと。ある家を見つけて。戸を叩きよと呼ばゝ。奥より
出たるは。谷義氏程の若者なり。狼まだ来ざるかと。
さゝ。我と月よ雑ぎくるわどよ。奥刈岩魚山里より来る。
あるじと。並びゐたり。小男房なるよの湯を出れば。足ふり出羽乃

一

国なる。谷義介おのれも馬方山人が弥人なり。まづ酒なりと
もあんと。出でよ里の酒やに行こう。床なる猿どもまれが。おくも
酒さゝを飛の出る。谷義介そよ会の酒なりと。酔よ雪でてよの酒や
とそよの出。乃二三町ばかりよ。酒やの灯ちくと後のつれともぐ
ろまれが。谷義介さまう。床なる猿どもまれが。おくも
声をこれ聞ゆく。旅人かいまぐ納りの宿。
一ツ白狼出ぐ。ゆくの旅人をくらひろ也。
と越ろの中よさこれなよろく当の知脈ろう。数十匹之の業法を
出て。狩人合ドもひ。この狼と狩らせあんた。此狼どその大サ牛の

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

ごく。白斑毛の狼ども群りく猟人おがみにのぐだ。されがそ
れ程でもう出山を越す旅人など已年まの三荷のみゆう。あらばやま
すでぶ七つりのそ申の刻ごろ旅人ひとにこれもうこうて今
更我無二着しのひかるろうまとなる合でぶを越のこと云られべ。
谷荒おぎ知ひとまた命おぢる風とつく旅人をとめ強儘を
せんとするぞや。人が狼と恐まんが我が狼と恐れぜ。豈ぶぐや。就
狼よりはるがこそこそと旅毒の悪のおぢる我男のこと
の神ごと云れぜ。言を大よそうとそれぐ二荷の着悪人とおて
告ぶた。旅人ふりさをおぢと人おぢこそおぢ。ん悔をまり

あんと云おぢのまぐ日毎へ通りくる谷荒ぶ呈にまも乃十三二十
めくるぶ出のそ日の松のはを削。仰毎ん書射くみう通くまそ
是ごろ則　近出岩る出狼出ぐ多くれ旅人を害をぶ今
出越人旅人已年未れ三時。二三十人の乃体を待て。ば山を
通るべ。その刻時刻よ。一ぶ人まそ越ることを許さぐと書
付くう谷荒おぎ知ひうの通とりの深とりぶ旅人とお
独りうけとせんとそるそ狼ども。ば山ちや
貝谷荒て月出の場をてぶ瀑布織こと流き松風頭こと吹て。
仁のとぶんお湯し。谷荒恐ひくく。ん毒周の松乃せんぶ出ぬう

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

]うへ。うの体なほうんとうひ。が。之助の喜うに勢ふ人の中を
雅く。乃とおそひで又大内へ参うとうに又出る谷義の後毎の馬の乗
狂猟会れとおうれ娚とさがをと見へう。のそくてもうみせんと。
ぜ。参うにねだうれをして郎まうの谷義これをうんでいる盗
の者を追ひられ山へ出るうんで又きうの根とおっ。参うに
するの又六度み及び。己よ捕へ人とする時。のそうくねそうて。
そるに乱うせる。谷義おうをそれがいつ〜うをそちが人ふ
へうの又六すおう谷義大なをまあく。乃とおうとあく出んとする和た
山ふおうと吹おう〜。一之の狼うみ出そう。その形の半うもおきく

谷義と言てうるとみんく狂そうろう。
日海の眼。肚月の牙爪と除立。谷義
かぐ〜。松の大木とふ捕よろく。かの狼に高ふ狼の走きうに吼く
谷義と狂そうる。谷義かなて雷よおうひ。武義の主人。
とふ酒の酔十分にのおそく。力日ど称よ十倍せ〜ぐ。
とかう〜て狼のうろよう。狼谷義と狂そんでぬてび狂をと
うけず〜。かくのでそするの又六度
近て見を吟ふ今武義にとれうる谷義ふ。狼
見に乱と奉れ勢ひ大ふ受れう。

狂亭谷義遠と見せ。指て
眼だま。谷義が指のさゝめくと
が指。いと床に松の木おそろ
同く指ある指の狼にもづと組
いとそこが春駒角力とみれ
指今くたゝうそだ。狼大ぎり
のお兵ま。三の穴をかり
狼の口を穴の内指まで。左の
あり上狼の眉を尽んぐ。つき

ちゝと右のこぶし金平ま
にまでることゝれがさまの狼眼
のごとぬを見定のおる指と
らればいよく狼が死きりぬ。谷義狼
四足をゆん上てうぬりが。その
ことのだ。谷義が力まてかゞまぬ
うじ。力大ぶつれが。狼と
ゑだゞより又左足の狼矢おう
狼をこじ。力をでにつれるに

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

家にありて、ふうんと、ようく眼をさまして見てあれば、狼人のごく立てありくるちかくなりてこれをみるに、六人の猟人狼の皮をうばりこの難にうれおそれかの白狼と狸谷義が山を越えてまさりしとふもんは委細の訳を聞きたるに、谷義猟人共をも伴て狼をころしたる事。記しる狼をうれせられが猟人共と行とうもし激に見つけ狼をうばうと以ておころしめ勇力いみの朋友なり。扨て谷義を伴なおし（ほをし）たうられば、扨なおしたの世帯の先にの狼を六人よびよせられば、その座敷谷義を始め一同のよろこび一方ならず。谷義をめかけのひと名を招のぞみを聞かられば、谷義が勇力をかうふ立てく。凡物するのうんみだの算よろしくる方まで高の勇士あることを思のまれるりとて谷義をめかけのひと名を招のぞみを聞かられば、谷義が勇力のさまざまの事ありて互にやく三年。

死衝の治生屋もまた小三板を放ち利益を失ひ公儀へ訴出ども、傷害の為に潰らまして。山里の柳巷ぞのひ。ろ尾とのる娼妓の朋友ありて互にやく三年。

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

それ天のおくべき比翼連理の枝。さびに死ぬる子規まで
ご超言と立て中迎と教盛の雲水僧らまで号め人ぶをざろ。ごる
尾の浦の松風毎日夜ぶをつけて教盛卿の
幽霊三浦の十郎義三平人同じ
尾が月落せんと花街小柳ある今の
教経ぶをの袴ぜ。夜るを表する
生のかきいろ。行くぬふる男の世
立花に做ふ兎の牙猪造物の主尾月
今ぞ花さく太ぞ。扱の兎の投ぶたの。
より。大門口よりはめよせく。芽妻への駄ぶみ参郷元うりかくが
兵部のおよまつる名のり合ぶみを投ふうきよれ教も柱を殺す
酒ぶおの五びでふみをひらふこと。そとうぐぐ猪ふって陽ふうこび
ふく鉄び猪ふの実に川井の。竹よりまれる
屋ののうりだでう舌切雀ぶ
連下ぶ。ぜんざいぶ生舎ぐふの
乳ぶれ母。上長柄の教盛に
男言のぶまにる尾りうとものぜ
泊も浅川の崖の汀のあるさうに

つまびらかにせざる事多し。細川谷尾舳先ホ三里。乳づりや姉
崎松ヶ谷のあるべしと思はれど、此の辺放牛多くして
よくわからず。鬼つら。仁木れうと仏ヶ倉。
ヨろくの松里の湯本ヶ谷ヘの道、根
本鬼つら。仁木れうと仏ヶ倉。
本山道をも。ヶ條の道一筋なき山奥林の方と云義におそし。害ー
やせ一ヶ所とぞ。又の名義の士と書ぎけ。
紺屋武烈の要害と称する。早稲御
ぬき家舎たう出名細川のお大将
ほり切の法主春つぬ云るてうちよ。
のの兵びもようび。暗くなるまでいづ方ともわかぬ。

らま執権ぬ。和尚寺まるてりこのき時
云すてうりへも。ヶ所のそちぬめ事ぜ。細川公ヶの人とも。品ぶくる斗
なり。谷尾ヶ方の事出ぶるまぬびーう
外ぬぬぬ

うつ[illegible]のうつ。まねてせうぶの[illegible]。今こゝを海もひわさうじぞや。その[illegible]。平家のまもかくやうんと。[illegible]のうひとりきびしがる[illegible]。[illegible]。谷義さんそめーえの[illegible]。[illegible]。[illegible]。

のやうの追ぎるぐう。山口風かも北のく。まみろ川もなう。十町の
熊谷山一里の糸巻乃尾のようにうつきぬ秋も暮ぎくもうぐれて。
君とうやまくその月指在ようのひ勢ぬ勢ぬや
記念共獲物と仔よく下。月山きぐんあめならぐろうろう
皆ろ君ぬもうの夢るもれく。投の末の指よかくまろれべ山辺あの
法の生当さうぎ。投つよ指よくとあせれども。久なよの大多のまおよ
ぎ月よあんろ共指とめらむぐろうり。辺智かうら荒郷み
男ら投生と追のきてやろう。投く。投に呂ろぐろ男との糸。イヂく
そ末と根とぎあく。夢とそとくべーと。大小ろく浅にさぎ。

あのそぐ抑ぬひで。朱ようもなうき勢とあろ。一かくある大榎
根のとにあるとみ。エイとあるとみ。エイとあるとみ。エイとあるとみ。
さもぐれ大木根ようぬけ。根ぐをあろとうろ。
又く。投も勝ろの大力やと。あぐろ
あぐそうの多の末と横ようあ。指あかくしく義勢をなの若もあく
とくく。べ生ろぐきぐんろうしく。派ぎ男ら助ふうびとろ
せよとのの〳〵浪今根ら偏投乃吸筒投く虫。兎これ勢ぎ浦そ。
今とのぐ赤代乃名浦。今日男男ぎ
くれど。荒郷みぐう。今の働き。立ようびみちさる。ありづく

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

ろく義あまと。大王をさ一。芽が荒猟しくできる。
すまるち。初君をとらに。もくやりろ。あぶろを初君を
初君の補佐をうとも。ろぶっ一重のろ。初君のよ
あぶ。芽ろく初君をうもさろれねろ。
いた差猟よかろうとう。海の義いいくまるに新べ
と雑遠されぶ。ろぶ仏よせひるく。
ろをくうける雪をぬ。いくひてのこころ妙の改岡
これとこそ。てろに汗ぶろおうこぬう。笑ろるろ男ろ猟み

てあろ。ろ玉瘢麻呂ようぬを追。ちろ
抱ろき初君。抱ままする。その抱
ゆるき。落の弁ようもうて。初君のろ
ろぎと。智ろ猟。見ねお新ろあだこのだ
笑へろう。イサ火を消さろのだら。我よはびて手ろまよと
一ぶんまうけ出せぶ。あとろ追ふ。
三くもりぬ。河よ西風さんの。初君の口をまちろく。坐と
吹立をまんれぶ。ろ玉ろ抱きまろを源をちろくと
ろぶしてやろの。悪人ぬろれ様よ抱とさ。れ。我よろ男ろ衣汗

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

くすりぐの毒にあふ。又ふたゝび死人のごとく
なるの。娑婆世界のあぢきなや。今日に
いたるまでほしくて。悪人どもの口にかゝりて
ひさしくくるしむ。是も善悪の二業をもつ
て。此身をたもつのゆへなれば。是非なき
次第なり。扨又此度改易ありつゞいてよりう
ばはれ。流浪の身となり。一えんふりけまさう。
ほうこうをするにおゐて。幼君の御ためばかり
ならず。御家の御為にもなるべきと。存じ
入の外なり。然ル所ニ。此度御家中の
ものゝ。かの神がゆうもをとらへる事。
七八年度ゝけゆり。おのれと神の祟もさぞ
あらん。御家御滅亡に及ぶ薬の毒気も
あるべきと。存じ入まする。是ハおのれ
なり。幼君をたゞよろづ死。右の御恩
しんぞ。これでゆるされ日本武士の
におゐては。勇士の始
まをれしのち。娑婆のうちよ風ろう。
一をでれたをもてきうべ。

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715
ガラス使用

208
5
715

親とのがれ初君とうづきなり。鮒へそこの立つる。掘に若狭の
が捨てまつりて。深家の平氏の名殺害
夢と名付。平家の史通を切るびけい宝剣あり。ことはら
重盛の神が若死。若狭が勇力。政基が若んか。かる天の物の
初君。生死さへ。あうんのうんめいとあらびひ。
あらびひ。春日と君との神が若死をなげき。人間の
礼をとろく。あろく葬をもひろ。

言尾船字文 巻三冊 早

中立文庫

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用

国立国会図書館　高尾船字文 5巻 208-715

ガラス使用